

## ESDへのアプローチ

### 1. ESD とは何か

「ESD (Education for Sustainable Development、以下ESD) とは何か」という問いに対してあなたはどのように答えますか。

近くに人がいれば、その誰かに「ESD ってなあに？」と尋ねるかもしれません。

でも、残念ですが、今まだこの言葉を知っている人はあまり多くはありません。答えが返ってこない可能性の方が高いのではないのでしょうか。

アルファベットや英語で書いてあるので、自分で辞書を引き答えを探そうとする人もいるかもしれません。

すると、ESDは「持続可能な・開発のための・教育」らしいことが分かります。でも、「持続可能」とはどんなことなのか、「開発」とどんな関係にあるのか、そのための「教育」って何なのかは、よく分かりません。

そこで、インターネットの検索エンジンに「ESD」と入力して調べてみる人もいるかもしれません。

出てきた検索結果は、およそ14,900,000件(2009年3月現在)もあります。

最初の1、2ページを見ただけでも、ESDは「NPO特定非営利団体」「環境省」「文部科学省\*」「国連大学」「立教大学」「財団法人ユネスコ・アジア文化センター」などの機関で扱われているらしいことが分かってきます。

第Ⅱ部執筆担当：成田喜一郎（東京学芸大学大学院教育学研究科教育実践創成専攻 教授）

それぞれのページをめくっていくと、確かに「ESDとは何か」という定義に触れた記事もたくさんあります。また、ESDという言葉に市民や行政、学校・大学・研究機関などがかわり合っている事実も見えてきます。

さらにページをめくり、いろいろなリンク先に分け入っていくと、ESDには、国際的歴史的な文脈(第Ⅳ部「ESDと『国連ESDの10年』」参照)の中で、わが国の提案により国連総会で決まり、国内でも取り組まれ始めていることも分かってきます。

しかし、「ESD ってなあに？」と子どもたちから尋ねられたとき、わたしたちはどう答えたらよいのでしょうか。

この小冊子では、まずはこう答えておきたいと思います。

**ESDとは、わたしたちと世界中の人々・将来世代の人々が生き続けていける未来をどうつくっていくかを、学校や家庭・地域・国・世界を舞台に、みんなで調べたり考えたり、意見を出し合ったりしながら行動していける子どもやおとなになるための学習のことです。**

きっとこれでも満足できない子どもたちがほとんどなのではないでしょうか。

たとえ声に出して質問をしてこなくても、「ESDでは、どんなことを学ぶの?」「教科、道徳、学級、総合的な学習、どの時間に学ぶの?」「なぜ、ESDが必要なの?」という問いを抱くに違いありません。もしかすると、中学生などは「ESDを学んで何か意味はあるの?」「ESDなんか学んで学力は身に付くの?」なんてひねた問いも抱くかもしれません。

今、子どもたちからの素朴な問いを想定して述べてきましたが、もちろん子どもたちだけではありません。多くの市民や行政に携わる方々、企業にかかわる方々、そして、校長をはじめ学校の教職員の中にも同じような問いを抱いている方は多いのではないのでしょうか。

わたしたちは組織や仲間うちで共通する言葉や概念を分かり合ったつもりになって使い、議論したり行動をともにしたりすることがあります。これまでそれぞれの組織や仲間と分かり合っていればよい言葉や概念もあったでしょう。それはそれで意味あることであつたと思います。

しかし、ESDという概念はこれまでの概念とは全く異なり、とても大きな領域横断的な概念なのです。

たとえば、学校教育の現場に耳を傾けると、「わたしたちは環境教育をしています」「あなた方は国際理解教育に力を入れているのですね」「わたしたちの学校は〇〇教育の実践や研究をしています」「あの学校はとても学力向上に熱心に取り組んでいるようですね」「となりの学校では特色ある学校づくりを目指しています」「わたしの学校は特別なことをしていませんが、定められた教育課程をしっかりと着実にこなしています」と、それぞれの文脈の中で教員や学校の教育にける重点が異なっている現実に出会います。

それらの重点をうっさり新たにESDをせよということではありません。ESDは異なる組織や社会、異なる教科・領域、専門性を超えて共通する言葉や概念にしていかねばなりません。あらゆる組織や社会、教科・領域、専門性がつながりやかかわりを持ち〈協働〉して、ESDという概念に広く深く包まれていくことが求められます。

では、子どもたちが抱くだろう「素朴な問い」を踏まえ、「教員や学校はESDをどのように受けとめ、どのように進めていけばよいのか」という「本質的な問い」にどう答えるのでしょうか。

わたしたちは、限界や境界を超えて、目の前の子どもたち、目の前の教員・学校、目の前の保護者や地域の人々が抱くだろう「問い」を想定し、その問いに対する「答え」を用意する必要があります。

「ESDとは何か」という、より広く深い「本質的な問い」への「答え」はたぶん誰も用意してはくれません。わたしたち一人ひとりがその「問い」を受けとめ、子どもたちとともに「答え」を探しながら、学び暮らしていかなければなりません。

これらの「問い」にすべて答えることは至難の業かもしれませんが、この小冊子にはそれらへの「答え」を探るためのヒントを忍ばせてあります。

## 文部科学省\*「ESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、学び方・教え方」

\*文部科学省では、ESDを普及するために「持続発展教育」という言葉を用い、ESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、学び方・教え方について、以下のように述べています。

### 目標

- 持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること
- すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること
- 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

### 基本的な考え方

- ESDは、持続可能な社会づくりのための担い手づくりです  
ESDの実施には、特に次の2つの観点が必要で  
— 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと  
— 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むこと
- 環境教育、国際理解教育、基礎教育、人権教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別分野の取組のみではなく、様々な分野を多様な方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが重要です

### 育みたい力

- 体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的・総合的なものの見方）
- 持続可能な発展に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）を見出す力
- 代替案の思考力（批判力）
- 情報収集・分析能力
- コミュニケーション能力

### 学び方・教え方

- 「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること
- 単に知識・技能の習得や活用にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチとすること
- 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと  
<http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>（2009年3月3日取得）

〔問い〕 これらの目標や考え方、児童・生徒に育みたい力、学び方・教え方とこれまで行ってきた教育活動や研究、これから行おうとしている教育活動や研究と共通する点はどこでしょうか。また、異なる点はどこでしょうか。あなたが行う教育活動や研究に取り入れることのできるようなことはどこでしょうか。

## 2. ESDへのアプローチ –「教材」の選択から「評価」のしかたまで–

ESDを広め深めていくためには、どのようなアプローチが必要なのでしょうか。

この小冊子では、国連・国際機関、政府・文部科学省、教育委員会・校長などから〈これまでのように降り立つアプローチ〉ではなく、子どもたち、教員・学校、保護者・地域などから〈未来に向けて舞い上がるアプローチ〉に焦点を絞って考えていきたいと思います。

〈この未来に向けて舞い上がるアプローチ〉のあり方については、まさに、第I部で紹介してきた13の事例を中心に読み解くことによって探っていきます。

- 事例 1 松阪もめん（伊勢市立五十鈴中学校）
- 事例 2 ピクトサイン（江東区立東雲小学校）
- 事例 3 奈良の世界遺産（奈良市立済美小学校）
- 事例 4 ペットボトルキャップ（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
- 事例 5 源朝長（袋井市立三川小学校）
- 事例 6 回転寿司（葛飾区立本田中学校）
- 事例 7 学校図書館（鶴岡市立朝陽第一小学校）
- 事例 8 ECOピカセット（岡山市立津島小学校）
- 事例 9 面瀬川（気仙沼市立面瀬小学校）
- 事例 10 はらぺこ体験（上越市立大手町小学校）
- 事例 11 防災マップ（宮城教育大学附属小学校）
- 事例 12 アンケート調査（奈良教育大学附属中学校）
- 事例 13 モザンビーク（松山市立新玉小学校）

これらのESD教材とその実践には、おおよそ以下のような共通点と留意すべき点があります。

### (1) ESDの「教材」はどのように選択されるのか

- ①子どもたちの気づきや思いから：たとえば、ピクトサイン、ECOピカセットなど。特に、ピクトサインは子どもの小さなつづみやきを教師が聴き受けとめたところから教材化されました。とかく話すこと教えることに傾斜しがちな教員ですが、できる限り子どもたちの声と言葉を聴くこと、子どもたちの表情や仕草を観察・察知することに力点を移していくことが大切です。
- ②教師の思いや願いから：たとえば、松阪もめん、奈良の世界遺産、ペットボトルキャップ、回転寿司、学校図書館、面瀬川、はらぺこ体験、防災マップ、アンケート調査など。これまでの教育活動や研究の文脈の中で、教師が目の前の子どもたちに投げかけたい「問い」や教え伝えたい「こと」から選択されてきた「教材」です。あなた個人だけではなく、同僚や先輩の実践などに学び、ヒントを得ることから「教材」を発見することも大切です。
- ③保護者や地域など校外の方々の思いや願いから：たとえば、モザンビーク、源朝長など。これらは、保護者や地域など校外の方々の思いや願い、専門家と教員・学校との連携・協働の中から選択されてきた「教材」です。教員・学校の限界や境界を超えたところにある経験や専門性を持っている方々が扱われる「教材」には子どもたちも強く心を引かれます。

これらに、共通・通底していることは、子どもたちの暮らしと地域や国・世界とのつながりやかかわりが見えてくる「教材」、子どもたちの内面や行動に変化・変容を引き起こすような「教材」、子どもたちが学ぶ意味や意欲を持てるような「教材」であることです。子どもたちも教員もワクワクしてくるような「教材」は必ず見つかります。

### (2) ESDではどんな「内容」が扱えるのか

ピクトサイン（子どもたちと福祉）、松阪もめん（子どもたちと地域・世界・経済）、奈良の世界遺産（子どもたちと地域・世界）、ペットボトルキャップ（子どもたちと数学・世界）、源朝長（子どもたちと地域・歴史）、回転寿司（子どもたちと漁業・世界）、学校図書館（子どもたちと読書・図書館・情報リテラシー）、ECOピカセット（子どもたちと環境）、面瀬川

(子どもたちと川・環境)、はらぺこ体験(子どもたちと食・世界・身体)、防災マップ(子どもたちと災害)、アンケート調査(子どもたちとデータ・資料)、モザンビーク(子どもたちと世界)など、常に子どもたちがつながりかかわる「教材」から見える内的世界・外的世界がある。この13の事例をヒントに、あなたの目の前の子どもたちにもっともふさわしいESD「教材」とは何か探していきましょう。

また、ESDの学習内容は、いわゆる教材やコンテンツだけではなく、以下のような関係性や対話、学び方、考え方、表現のしかた、みずからの心や身体、行動そのものまでが学習内容となります。

- ① 子どもたちとひと・もの・こと・おかねとのつながりやかかわり
- ② 子どもたちの現在と過去・未来(時間)とのつながりや対話
- ③ ここにいる子どもたちと異なる国や地域・場所のつながりやちがひ
- ④ 子どもたちと知識や情報・データとの出会い、探し方や伝え方
- ⑤ 子どもたちの心や身体の変化や様々な影響
- ⑥ これからも続く問いの発見とかかわり
- ⑦ 今、ここで子どもたちにもできる未来への行動

### (3) ESDの「ねらい」はどのように設定できるのか

①〈未来に向けて舞い上がるアプローチ〉では、目の前の子どもの学びや暮らしの履歴を踏まえて、子どもたちをより伸ばしたい、もっと身につけさせたい、ここが弱い、これが不足気味という実態に対応し、また、新しい学習指導要領を下支えにして、予察・想定される「教材」や「内容」からESDカリキュラムの「ねらい」を導き出すことができます。

②ESDの「ねらい」のもとに設定される学習課題や問いには、予め決まった解答はありません。したがって、これまでの教育活動や研究のように、教員の手のひらや学校・家庭・地域という土俵のうえで、予定調和的に結論づけられるものではなく、指導者・支援者も子どもたちとともにその学習課題や問いを抱えながら、教育活動や研究を展開していきます。ESDとは、〈試験管〉の中に「教材」と「子どもたち」を入れてその変化・変容を客観的に観察したりデータを集積したりする授業ではなく、〈試験管〉の中で「教材」と「子どもたち」、そしてわたしたち「教員」や「保護者」「地域の方々」がともに反応しながら主体変容をして

いくのをそれぞれが観察したりデータを集積したりする活動でなければなりません。しかもその〈試験管〉が割れて砕けてしまう可能性をはらみながらの教育活動・研究なのです。したがって、そうしたある種の緊張感を伴うESDの「ねらい」は、子どもたちのものであると同時に、常にわたしたちおとなのものでもあるのです。

③ESDの「ねらい」は、これまで行ってきた教育活動や研究や学習指導要領の改訂に伴ってこれから行おうとする個々の教育活動や研究と同じレベルの「ねらい」ではありません。ESDは、いかなる教育活動・研究ともつながりかかわり、また、それらをつつみこむ大きな「教育」概念だからです。さらに、意図され、実施し、達成されてゆくカリキュラムだけではなく、その学校や地域に脈々と潜在し続けてきた隠れたカリキュラム(hidden curriculum)がその「ねらい」に作用することが多々あります。特に、明示的なESDを実践しているわけではありませんが、袋井市立三川小学校や鶴岡市立朝陽第一小学校、上越市立大手町小学校などのような学校には、校長が何代も替わり多くの教員が異動してきたにもかかわらず、10年～20年以上も持続・継承されてきた教育活動があります。

こうした持続・継承される教育活動をしている学校に共通することは、それまでに教員・学校と家庭・地域がともに培ってきたつながりやかかわり(第Ⅲ部の「ESDではぐくむ『学力』」の中の「社会関係資本」の項参照)がしっかり根づき、教員と学校の限界や境界を超えた協働の力に支えられていることです。そして、地域に支えられエンパワーメントされた教員・学校が行う教育活動が子どもたちの生きる希望—自信や誇り、自己肯定感—を引き出していることです。三川小の子どもたちも朝陽第一小・大手町小の子どもたちも実に元気よく、学ぶ意味を理解し意欲にあふれています。そうした子どもたちの知と心と身体の成長や主体変容の姿に接した新しい校長や異動してきたばかりの教員も、教科・領域を超えて持続・継承されているその教育活動の意味や意義を子どもたちから学んでいきます。また、子どもたちの姿を見ると、家庭や地域の人々はますます教員・学校とのつながりやかかわりを強め、教育活動への支援や参画をしていくのです。子どもも教師も保護者も地域の方々もそのつながりやかかわりの中で生き生きと輝き、生きる希望—自信と誇り、自己肯定感—を高めています。

ESDの「ねらい」は、生きる希望—自信と誇り、自己肯定感—を引き

出し育み、「わたしたちと世界中の人々、将来世代の人々が生き続けていける未来をどうつくっていくか、学校や家庭・地域・国・世界を舞台に、みんなで調べたり考えたり、意見を出し合ったり、そして行動したりしていける子どもやおとなになる」ための具体的な目標として設定されるのではないのでしょうか。

#### (4) ESD ではどんな学び方、教え方をしたらよいのか

予察・想定された「教材」と「内容」、設定された「ねらい」にかかわる知識や概念、リテラシーやスキルを習得させ、変革への気づきや意欲と行動を引き出すためには、教員などが、以下のような本質的で根源的な「問い」を投げかける教育哲学の存在に気づく必要があります。

- ①世界は、一見バラバラに分断されているように見えるが、根源的にひとつのものであり、人間はすべてのものとつながり合っているのではないか。
- ②世界と人間一人ひとりとの〈つながり〉は、理性や論理だけではなく、それらと心や身体でつながる感性や直観・想像力、魂をゆさぶる「対話」によって根源的な認識や洞察をすることができるのではないか。
- ③価値観やものごとの意味や意義は、その〈つながり〉に気づきそれを自覚するところから生まれてくるのではないか。
- ④世界を持続不可能にしている社会の不正や困難など様々な問題や課題に立ち向かう社会変革への意欲と行動は、人間がこの〈つながり〉を自覚したときにこそ生まれてくるのではないか。

そして、教師が子どもたちに教える「伝達」型の授業と子どもたち同士が学び合う「交流」型の授業とのつながりとのバランスを踏まえ、そしてそれらを包み込む「主体変容」型の授業—子どもたちも教員等も価値観を揺さぶられるような大きな主体変容を迫られる授業—をめざす必要があります。

こうした「伝達」「交流」「主体変容」を貫く学習を行うには、常に「なぜ、わたし（子どもたち）は源朝長をアピールするのか」「読書や学校図書館はわたし（子どもたち）にどんな意味があるのか」「わたし（子どもたち）にとって食とは何か」など、ESDカリキュラムを貫く本質的で根源的な問いを子どもたちと教員等がみずから投げかけることです。

#### (5) ESD ではどんな評価のしかたと評価資料があるのか

どんな授業にも評価は必要です。子どもたちや教員の過去を値踏みするための評価ではなく、子どもたちの学びを未来に広げ深め根づかせるために、また、教員による学習指導のねらいや内容・方法をよりよいものへと未来に向けて改善していくために、評価は行われねばなりません。

当然、ESDの学びやカリキュラムがその質を高めていくためにも、持続・継承される教育活動にしていくためにも、評価は不可欠です。評価がきちんと地に足が着かないと、ESDは単なるイベントや一時の流行で終わったり、はたまたただ這い回るだけの実践だとの批判を受けたりすることになります。

ではいかなる評価のしかたがあるのでしょうか。

##### ① 評価のしかた

ESDにもっともふさわしい評価は、以下のような評価です。

●**ポートフォリオ評価**：学習活動や体験の中で作成した作品や記録、自己評価・相互評価の記録、指導・支援者による評価の記録などを時系列に集積する「ワーキング・ポートフォリオ」と、学習活動や体験の最終段階で成果と課題を明らかにするため、「ワーキング・ポートフォリオ」の中からその根拠となる作品や記録、自己評価の記録などに絞って作成する「パーマネント・ポートフォリオ」とがあります。ポートフォリオ評価とは、そのポートフォリオの作成を通して、子どもたちに学習活動の自己評価を促すとともに、教員も子どもたちの学習活動とみずからの教育活動を評価する質的定性的なアプローチのことです。ここで行われる評価は、ポートフォリオを介して子どもと教員との対話によって行われます。

●**ジャーナル・アプローチ**：ESDは長いスパンで展開される教育活動です。そのプロセスの中で子どもたちはいかなる思いや願い、あるいはいかなる疑問や違和感を抱えていったのか、その軌跡の記録を残すことが大切です。継続する振り返りシートへの記述や日記・手紙・エッセイなどを書かせていくとよいでしょう。特に、その日、そのとき学んだことの中でもっとも印象に残った「キーワード」を探させ、その

「キーワード」をなぜ選んだのかコメントをさせる「リフレクション・コメント」はきわめて有効です。それらのコメントをポートフォリオの中に継続的に集積し、学習活動や体験の「はじめ」「中」「おわり」で「今、自分（たち）はどこまで来たのか、自分（たち）の到達点と課題は何か」。自己評価や相互評価を行うことで、子どもたち自身のみずからの学び自体を相対化・対象化していく「メタ認知」を高めることとなります。

- **パフォーマンス・アプローチ**：ESDの学習活動や体験においては、座学だけでなく、様々な場面でインタビュー調査やスピーチ、自由討論、ポスターセッション、ディベート、ロールプレイングなど多様なパフォーマンスが展開されることが多いようです。そうした子どもたちのパフォーマンスに対して、みずから「ルーブリック」（評価指標：学習到達状況の尺度と質を示す評価基準表）を作成させ、自己評価などをさせていきます。
- **個人内評価型テスト**：ESDにおいて、持続可能な未来の担い手を育てるうえで知識・概念の定着はきわめて重要です。教員が「伝達」した知識・概念、子どもたち同士が調べ学習や体験を通して「交流」し獲得した知識・概念は、どうしたら定着させることができるのでしょうか。ESDでは子どもたちの主体的な気づきや意欲を引き出しながら、知識・概念を獲得させていきたいものです。したがって、ESD実践では相対評価型テスト（客観テスト）ではなく、「個人内評価型テスト（ルカーワ型テスト）」を採用すべきでしょう。知識・概念を問う問題100題を出題し、1題1点で100題すべて解けと言ったら前者のテストになりますが、たとえば、100題出題し、1題5点で、任意に20題だけを解けと言ったら、後者の「個人内評価型テスト」になります。たかがそれだけですが、子どもたちの多くは100点を獲得し、確実に分かることと、分からないことやできないことをみずから分けることができるようになります。そのとき、選択しなかったりできなかつたりした問題については、みずからアフター・ケアをするか、再度、同一問題を繰り返させるかしていきます。不思議と、子どもたちはこのテストが大好きになっていきます。

## ②多様な評価資料

- ポートフォリオに集積すべき作品や記録は、多様なジャンルの表現形式を持ったものであるべきでしょう。理性や論理を駆使して書き上げる「レポート」や「小論文」に加えて、感性や直観・想像力を生かして創造する「詩（創作叙事詩）」や「イラスト・絵画」「創作音楽・ダンス」など、絶えず子どもたちの左脳と右脳とのバランスに注意を払いながら、評価資料（作品）の表現形式に留意すべきです。こうした多様な表現形式や場面を用意することで、子どもたちの得意不得意に配慮し、学習意欲を高めていきましょう。
- ESDの学習活動・体験を通して獲得された知識・概念が個々バラバラにその意味や定義と一対になるような単線的な記憶ではなく、子どもたちが獲得した知識・概念が相互に関連・結合し因果関係を示した「知のネットワーク」として描き出される「コンセプトマップ（概念地図。あるいはイメージマップ、マインドマップなど）」は、貴重な評価資料になります。これは、子どもたちの内面にあるものを表出させるだけでなく、みずからの学びの履歴を相対化しながら自己評価を行ったり、友だち同士で相互評価を行ったり「メタ認知」を高めていくことができます。

## 3. ESDはどこにあるのか

ESDとは、日本と世界の子どもたちもおとなたちもが生き続けていくことのできる未来をどうつくっていくか、学校や家庭・地域・国・世界を舞台に、それぞれの限界や境界を超えてみんなが協働して調べたり考えたり、議論を戦わせたり、そしてみずから行動していける「人間」になっていくための広くて深い学びのことです。

同時代に生きるわたしたちが等しくみずからの生命と社会的活動が途中で断たれることなく持続・継承してほしいと願っているように、将来世代の人々もまた、みずからの生命と社会的活動の持続・継承を願うのではないのでしょうか。

しかし、今、地球上のあらゆる国や地域、わが日本、身のまわりの地域は、現世代のわたしたちの生命と社会的活動はもちろん、将来世代の

人々のそれらをも持続不可能にしてしまうような事態を迎えようとしています。

たとえば、「地球温暖化」や「資源・エネルギー」「戦争やテロ」「人権侵害」「経済的な格差・貧困」「宗教対立」「病気」「教育の格差」「犯罪」「差別やいじめ」、そして、最近では地球規模の「金融危機」などが新聞やテレビ、インターネットなどの情報を賑わしています。でも、それらの問題それぞれを一つずつ解決していくことはきわめて困難です。なぜならば、地球温暖化の問題が資源・エネルギーの問題やわたしたちの日々の暮らしとつながっていたり、貧富の差や宗教対立が戦争やテロの原因になったり結果にもなったり、ときにわたしたちも巻き込まれたり、差別やいじめが犯罪になったり、犯罪が差別やいじめを生み出したり、わたしたちもかかわってしまったりと、わたしたちと将来世代の生命と社会的活動を持続不可能にしてしまう因果関係は複雑に絡み合っています。

子どもたちとわたしたちおとながともに生き暮らしているガラスでできた「試験管」=地球・地域は、まだその美しさとたくましさを残しながらも、割れて砕ける可能性を日々高めています。

しかし、子どもたちは、教員・学校、保護者や地域の人々の中で生まれ、常に未来に向けて舞い上がろうとしています。また、豊かな知と心と身体を育み、自信や誇りを持って躍動する子どもたちの姿は、教員・保護者・地域の人々などおとなたちをも勇気づけ、自信や誇りを取り戻すことができます。

それは、本来、「教育」が持っている本質的で根源的な営みとその因果の連鎖なのではないでしょうか。ESDとは、決して特別な教育活動ではありません。

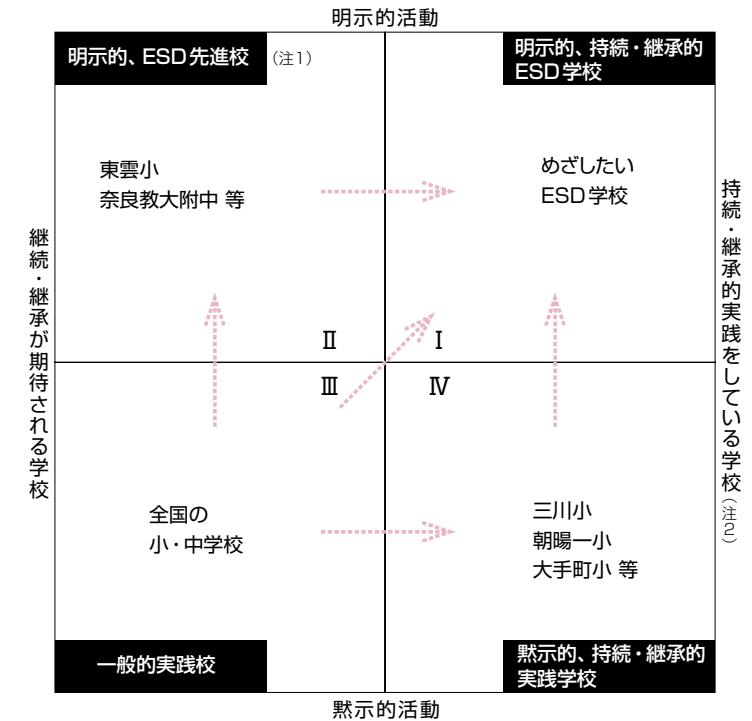
たとえ、どんなに「危機」「危険」があったとしても、オオカミ少年の如く「危険だ!」「危機だ!」と叫んでいるばかりでは、人々は気づきませんし動き出しません。

ベルギーのメーテルリンク(1862～1949)は、チルチルとミチルに「青い鳥」を探しに現在・過去・未来の国への旅をさせますが、「青い鳥」はいずれの国にも見つからず、挙げ句の果てに帰り着いたわが家に「青い鳥」はいたことに気づかせてくれます。

今、目の前にいる子どもたちとあなたが学び暮らす学校や家庭・地域の中の「教育」にESDを見つけていってください。もし、すぐに見つからなければ、ESDへのアプローチをヒントに今行っている教育活動を見直し作り変えていってください。

そして、ひとつでも多くの学校や家庭・地域が、明示的にか黙示的にかESDを実践し始め、さらに持続・継承される実践になっていくことを願っています。

#### ESD未来予察図【今、私たちはどこにいる? どこへ向かうべきか?】(学校編)



(注1) ESD カレンダーなどを作成して、学校全体でESDに取り組んでいる学校

(注2) 持続・継承性の指標：10年以上の持続・継承的教育活動

【作成：K.Narita2009】

#### 主な参考文献

- 成田喜一郎(2008)「持続可能な開発のための教育(ESD)カリキュラムの開発の方法—ESD推進のための試み—」『環境教育学研究』第17号、pp.33-59、東京学芸大学環境教育実践施設  
成田喜一郎(2003)「ホリスティック・カリキュラム論序説」『ホリスティック教育ガイドブック』pp.73-77、せせらぎ出版  
西岡加名恵(2003)「教科と総合に活かすポートフォリオ評価法—新たな評価基準の創出に向けて—」

## 補論 ESD教材・実践に通底する6つのアプローチについて

本書のESD13事例を読み解いていくと、「つながり」をキーワードとした、その教材・実践に通底する6つアプローチが見えてきます。

### ①生命・環境・経済・社会、文化の持続可能性を考えることができる教材・実践

- ・ 持続可能性を妨げる様々な課題への取り組み、課題間のつながりの発見。
- ・ 環境、平和、人権、経済、資源・エネルギー、災害、健康・安全、文化、情報、犯罪・ハラスメント等と私たちとのつながり。

### ②子どもたちと教師・保護者・地域の人々等をつなぐことができる教材・実践

- ・ 地域に暮らす様々な人々とのつながりとその持続継承性。

### ③子どもたちと異なる時代や世代間の対話と交流をつくることのできる教材・実践

- ・ 時間軸を超えたつながり。自らの学びの履歴やライフヒストリーとのかかわり。
- ・ 過去とは現在の記憶・記録であり、未来とは現在の期待・希望であること。

### ④ここ(学校・地域)と他の地域や世界との対話をつくることのできる教材・実践

- ・ 空間軸を超えたつながりと多文化間コミュニケーションへの模索。

### ⑤《本質的で根源的な問い》を愛し、抱くことのできる教材・実践

- ・ たとえば、「生命とは何か」「環境とは何か」「生きるとは何か」「人権とは何か」「平和とは何か」「安全とは何か」「歴史とは何か」「文化の多様性とは何か」「豊かさとは何か」「幸せとは何か」等、子どももおとなも共に抱き続けられる「問い」の発見とつながり。

### ⑥《本質的で根源的な問い》への回答を探すための多様な情報収集・活用、社会参画

- ・ 行動を引き出すことのできる教材・実践
- ・ 直接対話・インタビュー、学校図書館やICT等メディアの活用と知の再構成。
- ・ 生活者市民・行政市民・企業市民・NPO/NGO市民・教育研究者市民とのつながり、「協働 Coproduction」による社会参画・行動。
- ・ 実社会の中で《本質的で根源的な問い》を生き続けるということ。

また、これら6つのアプローチ＝視点で、いまここで行われている教育・研究活動を省察 Reflection することによって、持続可能な未来への希望につながる実践・研究へと広げ深めていけるのではないのでしょうか。



## 第Ⅲ部

# ESDではぐくむ「学力」